

《宮田 修》氏

「日本人は“いのち”をどう考えてきたか～神道から見た「いのち」～」

NHK アナウンサーから神主へ

10年ほど前までNHKでアナウンサーをしていました。1970年にNHKに入り、各地の放送局で勤務し、大阪には計7年間勤務しました。1995年の1月も大阪放送局の勤務で2府4県の朝のニュースを担当していました。朝の4時半に起床し、放送局に入り、ニュースの準備をし、昼までニュースを担当するという生活をしていました。阪神淡路大震災の日もそうでした。そういう時間帯に放送局に入りますから、その日も一番早く着いたアナウンサーでした。そしてあの第一報を伝えることになったのです。

アナウンサーをやっておりますと結構ストレスがたまります。そのため、休日を利用し、ある時期から、千葉県の田舎にセカンドハウスとして古民家を借りて過ごす生活をしていました。その家も生活も大変気に入っていました。

ところがそこには大きな落とし穴がありました。その古民家の家主が神主だったのです。その夫婦に後継ぎがいなかったことからなんと私にその神主を継いで欲しいと嘆願されたのです。

退職後を条件に引き受けたのですが、神主に資格がいることは知りませんでした。仕事をつづけながら通信教育で勉強を開始することになったわけですが、この勉強が本当に面白かった。なぜ面白かったかと言うと、日本人がこんなことを考えていたのかということが次から次へと出てくるんですね。神主は日本人の伝統的な考え方を勉強するわけです。その教材は、「古事記」「日本書紀」そして「万葉集」。先人が残した書物を読むのです。そういうわけで、日本人が長い歴史の中で「いのち」というものをどう考えてきたかということをお話しいたします。

伝統的な日本人の考え方とは

私は子供のころから、自分のいのちは自分自身のものだと考えていました。ところが伝統的な日本人の考え方はそうではないんですね。私がいまここにいるのは、両親、その両親と遡り、悠久の過去からいのちを繋いできたからこそだと。大きな衝撃を受けました。悲しくも途中で亡くなられる方もいらっしゃいますが、私たちはそういう大きなつながりの中の今を生きており、そのいのちとは自分自身のものではなく、お預かりしているものだということなんですね。

次に、日本人の生き方に欠かせない共同体についてお話しさせていただきます。

縄文時代の後期に、日本人のお米作りが伝わりました。弥生時代に入ると水を引く技術が確立され、これによって日本人は計画的に食料を保存しておくことができるようになったわけです。それまでは明日の食料が手にできるかどうかわかりませんでしたから、このお米作りによって、先ほど申し上げたいのちを繋ぐということが可能となりました。

そのお米をつくるために当時の日本人は何をしるかと言うと、共同体をつくるわけです。小さな共同体を作ってお互い助け合いながら米をつくります。それが日本人の気質というか、原点になっています。皆さんのDNA、遺伝子の中にもしっかり書き込まれています。そうか、私はこういう存在だったんだと教えられ、日本人のさまざまなことに対する考え方の基礎になっていることがわかりました。

ですから、共同体というのは皆が仲良くすることが大事なのです。それだけお米作りが円滑に進みますから。そして春先、お米が沢山とれますようにと、共同体にお招きした神様にお願いします。これが春祭りです。

秋になり、「お米が沢山取れてありがとうございました」「今年是不作でしたが来年はよろしく願います」と神様にお礼やお願いなどを言う、これが秋祭りで、そういう生活をずっと続けていたんですね。その共同体にお招きした神様というのが、神社の原点なのです。ですから、日本各地に神社は無数にありました。

初めは共同体の適当なところに祭壇をつくって神様をお願いをしていました。春と秋にお祭りをするのにいろいろな道具が要ります。その道具をしまっておくための倉庫をつくったんです。お招きした神様に住んでいただくためのお家をつくったんです。それが社、神社なのです。

そういう生活を送ってきたので、日本人は共同体の中で仲良くし、共同体のつながりの中でお互いのいのちを補い合う。一生懸命助ける。こっちが困ると誰かが助ける。だから、ご近所はみんな助け合うんですよ。ところが、今はやめてしまっていないんですか。

阪神淡路大震災のとき、神戸市長田区の真野地区というところがありましたが、街中の至る所で火災の火の手が上がる中で、その地区だけは火災が殆ど起きていません。それは何故かということ、真野地区には共同体が残っており、バケツリレーで小さな火のうちから、火を消すという活動ができたんです。お互いのいのちをみんなで助け合うという日本人の心構えがあつた地区には残っていたのです。2011年に東日本大震災が起きました。ただ、あそこでは津波で犠牲になる方は少ないと発災直後は思いました。あの地方には地震が来たら津波に襲われるということが共同体の中の長老などから言われているはずだから犠牲者は少ないと思いましたが、事実は違いました。言い伝えられていないんですね。

私は今千葉県田舎に住んでいますが、ここは共同体が残っています。その神社で私はお祭りをします。最後に直会（なおらい）という打ち上げパーティーのような宴があるのですが、宮司として氏子さんたちと様々な話をします。そのときに必ず申し上げるのは、「ここには日本の伝統的な共同体が残っています。それを是非大切にしてください」ということです。

伝統的な日本人らしさを

私は、私に神主になって欲しいと頼んでいただいた前任の神主さんにいま大変感謝をしています。当時は断り切れなくて引き受けたわけですが、伝統的な日本人の考え方を学び、本来の日本人に戻ることができ、多くの皆さんにも本来の日本人に戻っていただけるよう、このような話をさせていただいています。自分たちは独立した存在だ、独自に生活すればいいじゃないかとおっしゃる方もいるかもしれませんが、どこかに無理があるわけで、やっぱり、日本人は日本人らしく、お互いに助け合って、お互いに心の中を見せ合っていくのがいいと思いませんか。私はそう思っています。